

松江藩で利用された花崗岩類

朽 津 信 明
西 尾 克 己
稲 田 信

1. はじめに

近年の分析技術の進歩に伴い、様々な非破壊分析法が提唱されてきていることもあり、文化財の分析事例が飛躍的に増えてきている⁽¹⁾。石造文化財についても、例えば蛍光X線分析による石器の原産地推定など、様々な非破壊分析が既に試みられている⁽²⁾。ところが、五輪塔や宝篋印塔などの大型の屋外石造文化財については、それを実験室に持ち込むことが通常は不可能であることから、その分析は原則として現地でなされる必要がある。最近是可搬型のX線分析装置も少なからず開発されており⁽³⁾、現地で非破壊で分析を行うことも可能となっはいるが、実験室に試料を持ち込んで行われる分析に比べれば概して定量性は乏しいとされ、それによって議論できる範囲はおのずと限定的とならざるを得ない。このためか、屋外石造文化財の石材研究は一部で試みられてきた⁽⁴⁾とは言え、どちらかと言えばこれまでは各地域の石材をよく知る人間による、目視での石材鑑定が中心だった。個々の文化財についての石材情報はそうした方法によって蓄積が可能だが、巨視的視点に立って地域の枠を超えた相互比較を行うためには、客観的な基準で石材を記載する方法も必要となるだろう。本研究では、近世の出雲地方で認められる花崗岩類で造られた大型石造物について、主として帯磁率の調査に基づき現地で非破壊でその石材を分類し、その変遷について検討を試みたので、その結果を報告し、背景について考察する。

2. 出雲地方における石材利用の概況

出雲地方では、他の地域と同様に石器や古墳の石室など、古くから石材は利用されてきているが、石塔や石仏などの大型屋外石造文化財における花崗岩類の使用例は、歴史的に見れば意外に少ない。特に近世以後の出雲地方では、石灯籠や狛犬などの石材として、来待石と呼ばれる凝灰質砂岩が広く利用されていることが知られており⁽⁵⁾、それ以外の石材の利用はむしろ限定的と言える。

松江藩は、西暦1600年の関ヶ原の戦い以後に、堀尾氏が出雲国に入国したことにより始まるが、堀尾氏が関与した墓塔などの大型石造物にも来待石の利用が中心的に見られ、花崗岩類の利用は見あたらない。堀尾氏の改易後に続く京極氏の時代(1634～37年)にも、大型の花崗岩類製石造物の構築は確認されていない。

これに対して寛永十五(1638)年に越前松平家から松平直政が松江藩主として入国して以後になると、

花崗岩類の利用も藩内に見られるようになる⁽⁶⁾。例えば、出雲市大社町の日御碕神社にある石鳥居の中で、現在東側楼門前に建つもの（図1）は花崗岩類製であり、後述のように昭和の移築時に1639年を示す銘が確認され将軍・家光によって建てられたことが知られる⁽⁷⁾。日御碕神社ではその後も花崗岩類製品の奉納が確認され、藩主・松平直政によって奉納された寛永二十一（1644）年銘の石灯籠（図2）などが見られる⁽⁷⁾。この他、松江市の月照寺には、初代（1666年没）から9代（1863年没）に至るまでの歴代松江松平藩主の墓塔9基が残るが、それらはいずれも花崗岩類で造られており、またその周りを囲む玉垣、そして家臣が奉納した石灯籠も花崗岩類製である⁽⁸⁾（図3、4）。ただし、このように墓碑類が花崗岩類で築かれることは、近世を通じて松江藩内ではそれ程一般的なことではなかったようで、上記の藩主墓を除くと、出雲市平田町の極楽寺にある儀満家墓所でいくつか見られるなど、ごく僅かな例外的事例しか知られていない。

一方、松江藩内の社寺における花崗岩類製品は、上記の日御碕神社以外でも指摘することができる。例えば、現在の松江市・松江神社にある石鳥居は、もともと松平直政によって慶安二（1649）年に松江東照宮に奉納されたものであり、花崗岩類製である⁽⁹⁾。ただし、17世紀段階までに見られる花崗岩類製品は、基本的にはこのように藩主またはそれに準ずるレベルの人物が関与した特別な事例に限られ、それ以外の藩内の大型花崗岩類製品はいずれも18世紀以降に下る。

18世紀に入ってから花崗岩類製品は、例えば享保銘（1715～36年）を持つ雲南市・来次神社の石灯籠には藩主などの関与は確認されないなど、一般の人々にも利用が認められるようになる。その後、18世紀後半頃になると花崗岩類製品は松江藩でそれ程珍しくなく認められるようになり、特に石灯籠や石鳥居については、18世紀末以降の銘を持つものは藩内各地の神社で報告されている⁽⁶⁾。

以上をまとめると、松江藩における花崗岩類の利用は、松平氏が藩主になって以後に認められるようになるが、当初は特別な対象にのみ限定的に行われていた。それがあつた段階（18世紀前半頃）以後になると、一般にも認められるようになり、その数が増える、ということになる。本稿では、それぞれの変化の契機と、その歴史的背景について考察する目的で調査を行った。

3. 調査

3.1. 対象

旧松江藩内に残る花崗岩類製大型石造文化財の中で、銘の存在などから年代の特定できるものを調査対象とした。対象を表1に示す。

まず、日御碕神社では、石鳥居二基と石灯籠三基を調査対象とした。石鳥居については、先述の通り東側のもので銘が確認されているが、角貫の上側には「東西花表寛永¹⁶江戶將軍源家光公建立也」とあることから、西側の海側にある石鳥居も含めて寛永十六（1639）年に將軍家光によって建てられたことが窺われる⁽⁷⁾。また、東石の穴では「大坂尼崎や九郎左衛門謹職播州以御影石也」の銘の存在も報告されている。それぞれの石鳥居について、各二本の柱をそれぞれ別部材として合計4石材を調査対象とした。石灯籠については、楼門南西側のもつと日沈ノ宮拜殿正面の南北にそれぞれ置かれたものを対象とした。拜殿正面のものでは南北それぞれに「日御碕神前 寛永二十有一年甲申秋七月吉日 従四位出雲守侍従直政」とあり、初代藩主である松平直政が1644年に奉納したものであることが

確認される。また、楼門付近のものにも、「寛永二十一甲申年秋七月吉日 出雲守侍従直政」とほぼ同内容が認められる。いずれの灯籠においても銘が認められる竿石を調査対象とした。

月照寺の歴代藩主墓では、初代から九代に至るまでの墓塔九基それぞれについて、銘の確認される部材を調査対象とした。具体的には、初代、5代、6代、7代、9代墓塔については異形五輪塔（宝塔？）のため塔身石材を、2代、3代、4代、8代墓塔については五輪塔の地輪石材が対象である。また、各墓塔の周りにはいずれも四十九院玉垣が巡り、玉垣の基壇上には左右に石灯籠が存在する。それぞれの墓塔ごとに、玉垣を構成する石材として、各墓塔に向かって正面左側の石材（玉垣1とする）と正面右側の石材（玉垣49とする）を対象として、また基壇上石灯籠について、それぞれ墓塔に向かって左、右として、その竿石を測定対象とした。さらに、玉垣外部墓域内を巡る石灯籠群の中で、墓塔に向かって正面左側の石灯籠を石灯籠1として、その竿石石材を調査対象とし、さらに初代直政墓に関しては、そこから時計回りに順番に2番目、3番目、そして6番目の石灯籠についても測定対象とした。

松江神社の石鳥居には、「奉寄進 石華表 一基 東照宮大権現宝前 慶安二（1649）年巳丑曆四月十七日 出雲侍従 源直政朝臣」の銘が確認され、松平直政の関与がわかる⁸⁵。銘のある、本殿に向かって左側の柱を調査対象とした。

雲南市の来次神社では、享保十九（1733）年銘を持つ、手水鉢を調査対象とした。

雲南市木次町の斐伊神社と出雲市斐川町の栖雲寺では、それぞれ石鳥居において銘の確認される柱を調査対象とした。斐伊神社のもの（図5）は寛政三（1791）年、そして栖雲寺のものは文化三（1806）年の銘がそれぞれ認められる。また雲南市・三屋神社では、天保十二（1841）年銘を持つ、拝殿前北側石灯籠を調査対象とした。それ以外に、雲南市木次町の洞光寺の参道耳石（寛政十（1798）年銘）も、小規模な石造品ではあるが、参考のために調査対象とした。

さらに、松江藩内に産出する花崗岩類として、雲南市三刀屋町三刀屋付近の路頭（図6）において露出する岩体も調査対象とした。

3.2. 方法

文化財調査は原則として非破壊でなされる必要があるが、石材の分類を現地で非破壊で行う手法として帯磁率調査法⁸⁶が知られている。帯磁率とは、物体の磁化しやすさを示す概念で、通常はその岩石が磁鉄鉱をどの程度多く含むかにはほぼ対応する。同じ岩石名で呼ばれていても、磁鉄鉱を多く含む岩石は高い帯磁率を示し、磁鉄鉱が少ない岩石の帯磁率は低い傾向があるため、岩石の細分に有効に用いられる場合がある。厳密な化学成分分析値などとは異なり、帯磁率の値は全く異なる性質の石材同士でたまたま類似した値を示す場合もあり、それだけでは十分に岩石の性質を表現できたことにはならないが、石材を理解するための一助となる情報と認識することは可能である。測定はセンサー部分を石材に当てるだけで瞬時に得られ（図7）、非破壊で簡易に測定できる方法である。今回の調査では、Terraplus社の帯磁率計（KT-10）を用いた。花崗岩のように一つ一つの構成粒子が大きい対象では、部位によって多少のばらつきがあることが予想されるため、測定対象によって可能な対象では5点測定して平均値を記録し、それができない対象では1点のみの計測をしてそれを代表値とした。

3.3. 結果

結果を表1と図8に示す。帯磁率は一般に単位を持たない数値でSI単位系(SI units)で表現される。調査の結果、今回の計測で得られた帯磁率は、基本的には奉納年によって値の傾向が分かれ、年代が18世紀前半以前のものではいずれも 10^{-3} (SI units) のオーダー以下の値を示し(グループAとする)、18世紀後半以後のものでは、いずれも 10^{-2} (SI units) のオーダーの値を示した(グループBとする)。つまり、例えば藩主墓に関連して言えば、ある代の藩主墓石とそれに付随する石灯籠や玉垣の帯磁率は相互にオーダーとしては必ず一致し、4代以前の各藩主墓と、5代以後の各藩主墓とでその値が大きく異なる結果だった。また、雲南市三刀屋の路頭では、帯磁率は 10^{-2} (SI units) の値を示した。

4. 考察

4.1. 帯磁率の違いの持つ意味

帯磁率は同一の花崗岩帯内ではばらつくことも多く、その値は原産地と一対一対応にはならない。このため、類似した帯磁率を示す石材同士が必ずしも近接した産地で得られた石材とは限らないし、逆に帯磁率の異なる石材同士の原産地が離れている必然性もない。また、今回の測定結果を便宜的にAB二つのグループに分類したが、その原産地は二か所とは限らず、実際には様々な産地で得られた石材が、測定値の上ではたまたま二つの傾向に分類されているだけの可能性も十分考えられる。しかしながら、その得られたAB二つの測定値同士は共通範囲が全くなく、オーダーが明確に分かれており(図8)、松江藩内で利用された花崗岩類石材の特徴が、18世紀前半頃を境にグループAからグループBへと変化したことまでは指摘できる。

これまでの研究により、日本に分布する花崗岩類は、帯磁率の値に基づき大きく二種類に分類されることが指摘されており、それぞれ高帯磁率を示すものが磁鉄鉱系列、低帯磁率を示すものがチタン鉄鉱系列と呼ばれている⁽¹⁰⁾。日本列島内では両者の花崗岩類は帯状にほぼ分かれて分布していることが確認されており、一般には日本海側の地域では磁鉄鉱系列が、瀬戸内海や太平洋側ではチタン鉄鉱系列が卓越して分布している地域が多い⁽¹¹⁾(図9)。特に、中国地方ではその分布の違いが顕著であり、松江藩内に産出する花崗岩類はほぼ全てが磁鉄鉱系列に属し、チタン鉄鉱系列に属する花崗岩類は、基本的には山陽側など、藩外にしか分布していないことになる。このことは、山陰地方で砂鉄を利用した「たたら製鉄」が古来盛んであったことから実感することができる。すなわち、磁鉄鉱系列の花崗岩類に含まれていた大量の磁鉄鉱が、最終的に砂鉄の原料として山陰地方で利用されるに至ったと解釈される。

過去の研究に基づけば、磁鉄鉱系列とチタン鉄鉱系列との境目は、通常は 3.0×10^{-3} (SI units) とされており⁽¹⁰⁾、今回の調査結果ではグループAとしたものの殆どがチタン鉄鉱系列に分類され、グループBとしたものはその全てが磁鉄鉱系列に分類されることになる。厳密に言えば、グループAとしたものの中にも定義上は磁鉄鉱系列に分類される石材もわずかには存在することになるが、総じて言えば、松江藩内の屋外大型石造物に利用された花崗岩類は、18世紀前半頃を境にして、それ以前はチタン鉄鉱系列、そしてそれ以降は磁鉄鉱系列におおむね属すると判断される。

4.2. 石材の産地

先述のように、磁鉄鉱系列の花崗岩類もチタン鉄鉱系列の花崗岩類も、いずれも日本列島では広く帯状に分布しており、帯磁率の値だけで原産地を特定することはできないが、得られた帯磁率の持つ歴史的な意義については、文書などのその他の情報を考え合わせることから、さらに検討を進めることが可能となる。まず、今回の調査対象のうち、最古である寛永巳卯（1639年）の銘を持つ日御碕神社の石鳥居は、既に述べたように将軍・家光の命で造られたことが確認され、また「大坂尼崎や九郎左衛門謹職播州以御影石也」の銘から、少なくとも東側石鳥居はいわゆる「御影石」で造られたことがわかる。「御影石」という言葉が花崗岩石材のブランド名として定着するのは一般には18世紀頃からと考えられているが、「御影天正十七年」の銘を持つ花崗岩製の橋脚が知られる⁽¹²⁾など、遅くとも16世紀末頃からは既に御影周辺で花崗岩類が採石されていたことが確認される。この御影をはじめとする六甲地域で現在産出する花崗岩類の帯磁率は、これまで $0.06 \sim 4.21 \times 10^{-3}$ (SI units) の値が報告されていて、今回日御碕神社の東側石鳥居で得られた測定値は完全にその範囲の中に含まれる。この事實は、この石材が銘文通り御影の石材である証明にはならないが、銘文内容と矛盾のない結果が得られているとは言える。そして、銘では西側鳥居のことは言及されていないことから、厳密に言えば確証はないものの、「東西花表」以下の銘から西側鳥居も東側鳥居と同時期に同じ経緯で建立されたことが確認され、帯磁率のデータからも有意な違いが認められないその石材は、やはり東側鳥居と同様にして得られた石材と考えるのが自然だろう。

次に、日御碕神社に石鳥居が奉納された五年後である、寛永二十一（1644）年に、初代藩主・松平直政によって同じ日御碕神社に奉納された石灯籠でも、東西の石鳥居と類似した帯磁率の値が得られている。細かく見れば、3基測定したその測定値はある程度のばらつきを持っているが、いずれも先述の $0.06 \sim 4.21 \times 10^{-3}$ (SI units) の範囲内には収まっている。また、その他の18世紀前半までの銘を持つ石造物で今回得られた帯磁率データも、ばらつきはあるが、いずれも同じ範囲内の値を示している。これらの石材の具体的な産地は今のところ言及できる状態にはないが、その帯磁率から、少なくとも藩内で容易に得られる石材とは考えにくく、藩外、それも恐らくは近くても山陽側のどこかから搬入された可能性が示唆される。

一方、5代藩主・松平宣維の墓については、木次町の団野家所蔵の文書⁽¹³⁾の中に、製作者に関する情報を見ることができる。それによれば、享保十六（1731）年に死去した宣維の「宝塔」を、木次町の石工・団野八次郎が造った経緯が書かれている。団野八次郎はもともと和泉国（大阪府）の畑中三左衛門の八男で、享保元（1716）年から松江藩内の仁多郡奥出雲町上阿井で石工に従事し、享保十（1725）年から木次町にて石切業を営んだ。そして享保十六（1731）年に松平宣維の「宝塔」を製作したことでその手腕が認められ、肝煎に命ぜられて石工の棟梁格となっている。その子孫も木次町で代々石切業を営み、藩政末期まで御用石工をつとめ、藩主の墓碑を造ったことも確認される。木次町の近傍に産出する花崗岩類として、対岸の三刀屋付近の路頭で今回測定された帯磁率の値は、5代藩主・宣維の墓で測定された帯磁率の値と類似している。このデータも、5代藩主の墓石として三刀屋付近の花崗岩類が利用された証拠にはならないが、木次町の石工が製作したとの文献記録とは整合的なデータである。さらに6代以後の歴代藩主墓についても類似した帯磁率が得られており、やはり木次の石工が代々製作したとされる文献記録と整合的である。それ以外のグループBとした石材については、具

体的にどここの石材が用いられたかを推定する術は現状ではないものの、藩内のどこかの石材が用いられたと考えても帯磁率の面からは矛盾は生じない。

4.3. 石材の変化の意義

今回の調査により、松江藩において屋外大型石造物に花崗岩類が利用されるに至ったのは、基本的には1639年に将軍・徳川家光によって、日御碕神社に東西の石鳥居が奉納されたことに始まると考えられる。この時には、後にブランド石材として花崗岩類の代名詞となる「御影石」、すなわち、兵庫県六甲山地付近の石材が用いられたと考えられる。これは、奉納先である松江藩の石工技術とは直接関係なく、恐らくは将軍家の判断によって手配されて、奉納に至ったのであろう。

これに次いで、日御碕神社に花崗岩類製石灯籠を奉納した初代藩主・松平直政は、将軍・家光の従兄に当たり、その奉納は上記石鳥居の製作・奉納過程から何らかの影響を受けた可能性も考えられる。それ以後の、1705年没の4代藩主・吉透墓に至るまでの、藩外からの搬入品と今回判断された花崗岩類製品についても、具体的な製作過程については明らかではないものの、その奉納者及び奉納先が限定的なのは、花崗岩類の加工技術がその頃には松江藩でまだ十分には根付いておらず、そのために藩内では製作が困難だったからである可能性が考えられる。

これに対して、1731年没の5代藩主・宣維以後の歴代藩主墓は、藩内の石工の手によることが確認され、それ以外の18世紀後半以後に松江藩内に奉納された各花崗岩類製品も、それと同一の石工集団である必然性まではないものの、石材から考えると藩内石工の手によって製作された可能性が想起され得る。つまり、18世紀後半以後になって松江藩で花崗岩類製品の奉納者及び奉納先が限定的でなくなる背景には、それまでに花崗岩類の加工技術が松江藩内で確立されたことが一因として影響していると考えられる。

その松江藩内での花崗岩類の加工技術確立について、鍵を握ると目される木次町の石工・団野八次郎は、松江藩では遅くとも1716年から石工業を営んでいることが確認される。これに松江藩主が具体的にどのように関与したかはわからないが、結果から見れば藩外からの搬入品と見られる4代藩主墓に比べれば、藩内で製作された5代・宣維墓の方が手間や経費が削減されていたであろうことは想像に難くない。松江藩では、5代藩主・宣維の頃に財政が圧迫されて、6代・宗衍の頃に様々な藩政改革が行われたことが知られている⁽¹⁴⁾。今回確認された花崗岩類石材の転換は、その藩政改革の一環としてなされた可能性も想起され、少なくとも結果としてその藩政改革に一定の貢献を果たしたことだろう。

5. まとめ

松江藩で認められる花崗岩類製屋外大型石造文化財について帯磁率調査を進めたところ、その石材は18世紀前半までとそれ以降とで二種類に大別された。これは、当初は藩外からの搬入品が用いられていたものが、やがて藩内でも花崗岩類の加工が可能となったことを示唆すると思われる。

引用文献

- (1) 齋藤努(2010) 必携 考古資料の自然科学調査法, ニューサイエンス社

- (2) 東村武信 (1986) 石器産地推定法, ニューサイエンス社
- (3) 前尾修司・中井泉・野村恵章・山尾博行・谷口一雄 (2003) 可搬型 X 線回析装置の試作, X 線分析の進歩, 34, 125-132
- (4) 奥田尚 (1999) 石製多宝塔の石材とその採取地—大和・河内の古代・中世石造物 (1), 古代学研究, 147, 43-49
- (5) 多根令己 (2000) 紀年銘をもつ来待石製品, 来待ストーン研究, 3, 31-38
- (6) 伊藤菊之輔 (1965) 出雲の石造美術, 報光社
- (7) 財団法人文化財建造物保存技術協会 (1997) 日御碕神社神の宮宝庫保存修理 (災害復旧) 工事報告書
- (8) 「松江市の指定文化財」編集委員会 (2010) 松江市の指定文化財—未来へ伝える松江の文化遺産 250—
- (9) 内田悦生・安藤大介・前田庸之 (2001) 大分磨崖仏の帯磁率および含水率に基づく非破壊劣化評価, 岩鉱, 30, 59-104
- (10) Ishihara, S. (1979) Lateral variation of magnetic susceptibility of the Japanese granitoids, J. Geol. Soc. Jap., 85, 509-523
- (11) Takagi, T. (2004) Origin of magnetite- and ilmenite-series granitic rocks in the Japan Arc, American Journal of Science, Vol. 304, February 2004, p. 169-202
- (12) 田辺真人 (1998) 東灘歴史散歩, 神戸市東灘区
- (13) 木次町誌編纂委員会 (1972) 木次町誌
- (14) 乾隆明 (2008) 松江藩の財政危機を救え—二つの藩政改革とその後の松江藩—, 松江市ふるさと文庫 3

(くちつ・のぶあき 東京文化財研究所)
(にしお・かつみ 島根県古代文化センター)
(いなた・まこと 松江市教育委員会)



図 1. 日御碕神社石鳥居 (1639 年奉納)

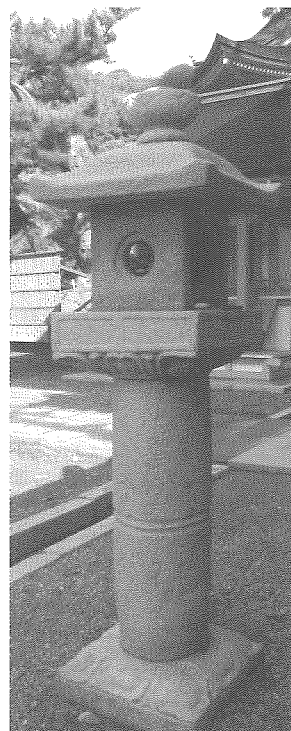


図 2. 日御碕神社石灯籠 (1644 年奉納)



図3. 初代・松平直政墓（1666年没）

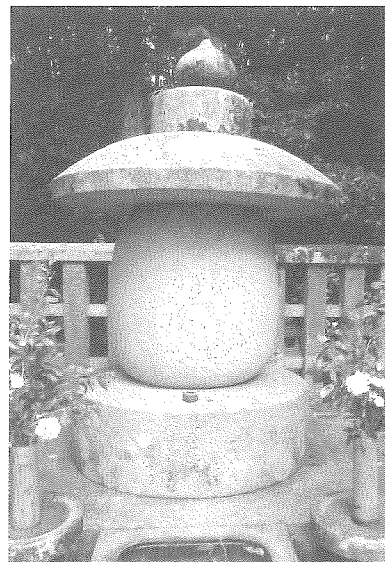


図4. 五代・松平宣維墓（1731年没）



図5. 斐伊神社石鳥居（1791年奉納）



図6. 雲南市三刀屋町三刀屋付近の花崗岩類路頭



図7. 帯磁率調査風景

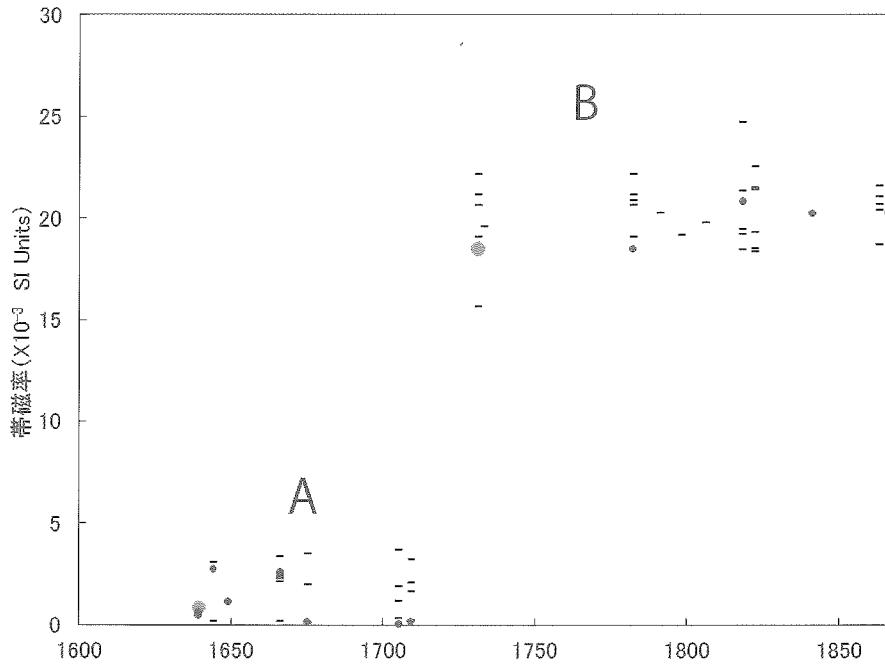


図8. 年代と、得られた帯磁率測定結果との関係
 ●：五カ所計測した平均値、—：一カ所で得られた代表値
 ●：産地の特定可能な石材（図の一番右のものは、三刀屋露頭で得られた値）

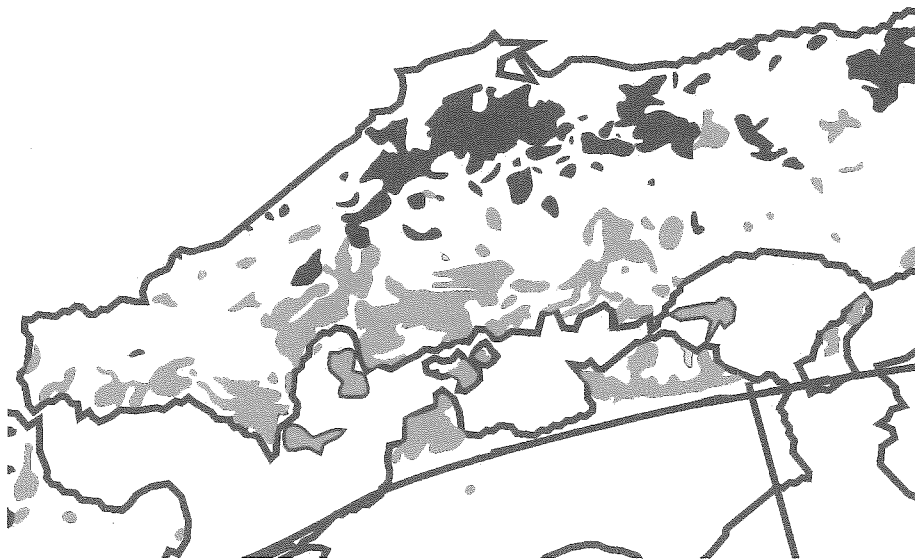


図9. 中国地方における磁鉄鉱系列及びチタン鉄鉱系列の花崗岩類の分布 (Takagi (11) に基づく)
 ●：磁鉄鉱系列
 ●：チタン鉄鉱系列

松江藩で利用された花崗岩類 (朽津・西尾・稲田)

所在地	対象	箇所	関与者	年代	帯磁率
日御碕神社	東側鳥居	南側柱	徳川家光	1639	0.848
		北側柱	徳川家光	1639	0.857
	西側鳥居	南側柱	徳川家光	1639	0.625
		北側柱	徳川家光	1639	0.464
	楼門前石灯笼	竿石	松平直政	1644	2.758
	拝殿前北側石灯笼	竿石	松平直政	1644	0.184
拝殿前南側石灯笼	竿石	松平直政	1644	3.081	
松江神社	石鳥居	南側柱	松平直政	1649	1.155
月照寺初代直政墓	墓塔	塔身	松平直政	1666	2.615
		玉垣 1	松平直政	1666	2.575
	玉垣	玉垣 49	松平直政	1666	2.435
		基壇上石灯笼左	竿石	松平直政	1666
	基壇上石灯笼右	竿石	松平直政	1666	2.270
	墓域石灯笼 1	竿石	松平直政	1666	0.186
	墓域石灯笼 2	竿石	松平直政	1666	2.115
	墓域石灯笼 3	竿石	松平直政	1666	2.620
	墓域石灯笼 6	竿石	松平直政	1666	3.359
月照寺 2 代綱隆墓	墓塔	地輪	松平綱隆	1675	0.170
		玉垣 1	松平綱隆	1675	0.066
	玉垣	玉垣 49	松平綱隆	1675	0.105
		基壇上石灯笼左	竿石	松平綱隆	1675
	基壇上石灯笼右	竿石	松平綱隆	1675	1.976
	墓域石灯笼 1	竿石	松平綱隆	1675	0.067
月照寺 3 代綱近墓	墓塔	地輪	松平綱近	1709	0.174
		玉垣 1	松平綱近	1709	0.228
	玉垣	玉垣 49	松平綱近	1709	0.170
		基壇上石灯笼左	竿石	松平綱近	1709
	基壇上石灯笼右	竿石	松平綱近	1709	1.659
	墓域石灯笼 1	竿石	松平綱近	1709	2.077
月照寺 4 代吉透墓	墓塔	地輪	松平吉透	1705	0.068
		玉垣 1	松平吉透	1705	0.300
	玉垣	玉垣 49	松平吉透	1705	3.690
		基壇上石灯笼左	竿石	松平吉透	1705
	基壇上石灯笼右	竿石	松平吉透	1705	1.169
	墓域石灯笼 1	竿石	松平吉透	1705	1.858
月照寺 5 代宣維墓	墓塔	塔身	松平宣維	1731	18.49
		玉垣 1	松平宣維	1731	21.17
	玉垣	玉垣 49	松平宣維	1731	20.62
		基壇上石灯笼左	竿石	松平宣維	1731
	基壇上石灯笼右	竿石	松平宣維	1731	22.14
	墓域石灯笼 1	竿石	松平宣維	1731	15.64
來次神社	手水鉢	手水鉢	不詳	1733	19.57
月照寺 6 代宗衍墓	墓塔	塔身	松平宗衍	1782	18.49
		玉垣 1	松平宗衍	1782	21.17
	玉垣	玉垣 49	松平宗衍	1782	20.62
		基壇上石灯笼左	竿石	松平宗衍	1782
	基壇上石灯笼右	竿石	松平宗衍	1782	22.14
	墓域石灯笼 1	竿石	松平宗衍	1782	20.84
斐伊神社	鳥居	北側柱	河口○兵衛・高橋幾太	1791	20.26
洞光寺	参道耳石	参道耳石	不詳	1798	19.16
栖雲寺	鳥居	北側柱	巖山十右衛門他	1806	19.77
月照寺 7 代治郷墓	墓塔	塔身	松平治郷	1818	19.43
		玉垣 1	松平治郷	1818	24.69
	玉垣	玉垣 49	松平治郷	1818	19.20
		基壇上石灯笼左	竿石	松平治郷	1818
	基壇上石灯笼右	竿石	松平治郷	1818	21.34
	墓域石灯笼 1	竿石	松平治郷	1818	20.84
月照寺 8 代斉恒墓	墓塔	地輪	松平斉恒	1822	22.54
		玉垣 1	松平斉恒	1822	21.49
	玉垣	玉垣 49	松平斉恒	1822	21.40
		基壇上石灯笼左	竿石	松平斉恒	1822
	基壇上石灯笼右	竿石	松平斉恒	1822	18.33
	墓域石灯笼 1	竿石	松平斉恒	1822	19.32
三屋神社	拝殿前北側石灯笼	竿石	菅田忠兵衛	1841	20.24
月照寺 9 代斉齋墓	墓塔	塔身	松平斉齋	1863	20.37
		玉垣 1	松平斉齋	1863	21.57
	玉垣	玉垣 49	松平斉齋	1863	20.69
		基壇上石灯笼左	竿石	松平斉齋	1863
	基壇上石灯笼右	竿石	松平斉齋	1863	21.06
	墓域石灯笼 1	竿石	松平斉齋	1863	18.69
三刀屋露頭	—	—	—	—	20.29

表 1. 調査対象と結果一覧

帯磁率の単位は $\times 10^{-3}$ SI Units

太字は五カ所計測した平均値、他は一カ所で得られた代表値。

松江歴史館 研究紀要

第2号

渡部彝の復権と周辺の間人模様	関 和彦	1
「松平齊貴上京行列図」に見る大名行列の構造	松原 祥子	15
幕末の松江渡海場 ——「御用留 船目代六右衛門」をよむ——	多久田友秀	36
松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について	新庄 正典	56
島根県初の私立和洋画学校「方圓学舎」入門者一覧	西島 太郎	61
松江藩領全域をおおう「輪切絵図」 ——安定的な年貢確保を目的に——	上杉 和央	78(11)
	大矢 幸雄	
	石倉 舞美	
松江藩で利用された花崗岩類	朽津 信明	88(1)
	西尾 克己	
	稲田 信	

平成24年3月

 松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No.2 MARCH, 2012

CONTENTS

Watanabe Tsune:An examination of his resurgence and influence on his peers. -----SEKI Kazuhiko----	1
Structure of feudal lord's procession seen in the "Figure of procession of Matsudaira Naritake visit to Kyoto" -----MATSUBARA Sachiko----	15
A basic study of the privileged group of sailors in Matsue in the end of Edo Period -----TAKUDA Tomohide----	36
The house which uses roof-tiles dug up from the remains of Matsue castle town. The roof-tiles have Japanese bellflower ornaments.-----SHINSYO Masanori----	56
A private art school was established for the first time in Shimane Prefecture "HOENGAKUSYA" list of students enrolled -----NISHIJIMA Taro----	61
"Wakiriezu" : Atlases Showing Land Tax Collectiion in the Matsue Domain -----UESUGI Kazuhiro----	78(11)
	OYA Yukio ISHIKURA Maimi
Granitic rocks used in Matsue-han , Shimane Prefecture in -----KUCHITSU Nobuaki----	88(1)
early-modern age	NISHIO Katsumi INATA Makoto

Published by
Matsue History Museum
Matsue, Japan

平成二十四年(二〇二二)三月三十一日印刷
平成二十四年(二〇二二)三月三十一日発行

松江歴史館研究紀要 第二号

編集発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇一〇八八七

電話 〇八五二一五五―五五一一

FAX 〇八五二一三二―一六一一

印刷所 千鳥印刷(株)

住所 島根県松江市黒田町四八四―一五

〒六九〇一〇八七六

電話 〇八五二一七一―七二五五

FAX 〇八五二一七―六九一七